フにこもっていました。

第2部を読みつつ脱帽。第1部で意図した問題提起は決して十分でなく，しかも必ずしも豊富だとはいい難い資料を活用して，多方面から解剖してみせた市民生活の現状分析は，階層性への意識も行き届いていて，苦労と努力の跡がうかがわれます。しかし……。

第3部は有能なハンドブック。これを読めば横浜市政について何でも語れます。何か必要な資料を捜したい時はとても役立ちそうだし，それに今度社会科の宿題で職場を訪れる小学生に，ぜひこのグラフを見せてあげよう。

さて，「市民参加による市民生活白書とはこうしたもの」といってしまえば終りである。市民生活を市政の現状分析としては立派に目的を果しているのだから。だが広報としての市民生活白書を，市民と市政を仲介する市民参加の有力な手段と考えると，問題がある。それは一つには3部構成の関連にあるようだ。こうした表現方法は，現象的なものが順次深まっていく過程で始めて興味深くなる。同一資料が各所に出てくるにもかかわらず，第3部で見せられる結果と，市民生活の実際とが果してどうかかわっているのか良く分らない。一見して分りやすい資料をという配慮がかえって全体の統一を欠いたのか，それとも市民参加の白書であることを強調したための，市政描写の慎しみ深さ故か。

二つには「市民参加」そのものの把握の仕方に問題があるのではないだろうか。行政の側から口に出せる真の市民参加とは，行政自身がそれを受けて立てるのかという厳しい自己批判に支えられたものではなければならないと信じる。組織や機構の問題としてたやすく扱うことを自戒しようと思う。

「情報の公開は市民参加の前提」であることは確かだが行政の側の不断の努力と誠意とに基づいた自信がない限り，真の情報の公開など決してあり得ないことを知って欲しい。行政の一部である広報は，だから自治体の具体的な模索の姿を，もっと積極的に赤裸々に描いて欲しかった。

教育人口の推移や学校数の増大や教育費の伸びをグラフで見る時，その重圧に押潰されそうになるが，善意に満ちた作文を読むと，少しは勇気が湧いてくる。しかし，市民と行政とのつながりを追っていくと，いらだたしいばかりである。

様々な問題と市民との中間にあって，「涙しつつ」行政を行なわなければならない生身の過程がそこには描かれていない。

〈教育委員会事務局施設部学校計画課　舟田瑳津子〉

私自身の痛みとしての『白書』

『私の横浜』には，新鮮な近親感がある。白書と名がつくものには，専門書としての特異な構えがあって，私には近づき難いものが多いからである。この新しい白書は，そんな固さがなく，身近な気安さで読めるためか，うれしいことである。「私の横浜」とあるように，白書づくりへの積極的な市民参加を試みられたことは，意義あることと思う。多様多層の市民生活観が，行政運営のむずかしさと同時に，人肌の温かさを感じさせてくれる。いわゆる弱者救済の行政も，この視点から考え直されるべき時代にきているのではないだろうか。

私は，毎日市民に接する職員として，住民の自治や参加に関心をもって読んだ。今日まで横浜が，革新自治体としての市民参加を，大きく推進したことは高く評価されている。また，さらに今後の発展成長には，多くの注目がなされているのである。

この意味合いから白書の読後に，私は，参加問題と白書のかかわりを考えさせられた。3部編成を

通読して，ちょっと物足りない感じがあった。それは，行政の市民とともに考えるというよりも各部の孤高の完結が印象として残ったからではないかと思う。

「市民の行政への距離」では，目を見開かされた。これに対処する行政の手当てや苦しみがあると，市民の参加意識が鮮明になるのではないか。また，住民運動と行政をめぐる具体的な成果と評価が，これからの参加問題を展望する上で，双方に重要なことであろう。

市民は，日常の生活感覚と深く結びつくところで市政をわが身にてらして考える。行政は，具体的な問題で同列同想の中から，市民の自治意識を高め，参加への道を模索することを課せられているのではないだろうか。

区民会議が，市政の中の重要な施策として推進されている。横浜の文化風土の上に，これが自治と参加を目指して，成長することを期待されている。これがためには，行政が泥をもかぶる覚悟をしなければ，行政枠内の遺物になりかねないのではなかろうか。

まず，行政の苦しみや痛みを素直に訴え，肌身にふれる話し合いが必要であろう。身近な問題をみんなで考え，自分たちの意見が具体的に実現し，それが市民生活にフィードバックされる体験は，何物にもかえがたい市民参加への学習ではないだろうかと考える。

これがためには，情報の公開が必要な条件となるのである。情報公開の建前に，各論の合意をえるのはむずかしいと，白書編者は述べておられる。この合意の困難さを，まず市民に知らせる余地すらもないのだろうか。書かれざる1編が，この建前と本音につながることであるならば，私の心には重いものが残るのである。

田代氏のいわれる必勝体形は，行政への痛撃な声である。この白書自身も，この体形にはまり込んではならないと考えている。それには白書が提示した，市民の主体性の基調を行政に位置づけ，一歩ずつ前進への道を歩むことである。既成のいわゆる行政体質の枠内では，その進展は望めないだろうと思う。

私は，時には机から離れて町なかに出て，市民とあいさつを交わし，雑談の中に身をおいて考えてみたいと思う。行政への疎外感の払拭には，心にふれる行動しかない現代の社会なのである。白書が教えてくれるものをわが痛みとして，必勝体形にならずに，新時代の市民参加を考えたい。

〈神奈川区役所市民課社会教育係長　田中昭一〉

参加に過大な期待は疑問

ある著名な都市経済学者がこう語った。「インフレと聞くとすべての人が困っているような気がするが，実はそうではない。ごく一部の層がインフレによって大きな利潤を得，大多数の人々が大きな打撃をうける。それだからこそインフレは悪なのだ。」

インフレの打撃は，多くの人々のなかでも，特に社会的に弱い層の人々において大きい。本書の価値は，都市に住む人々の社会層が住居形態に現出するのを明らかにしたこと〈P125-127〉，そして，人々の生活の悩みから「市民」の多層性を浮きぼりにし，行政及び政治過程への参加度を，その層との関連で把握しようとしていることにある。「少数の人たちを除けば，生活上の不安や悩みを切実にもっている層ほど市役所に接触することは少なく，行政にも政治にも沈黙を守っているとみることができる〈P113〉」。本書を読んで，「市民参加」について考えた。

納税者である市民はすべて，政治に参加し行政サービスを享受する権利を持つ。しかし，行政から